

恵みにしっかりと

ペテロの手紙の最後の挨拶、結びの言葉に今日はともに聴いてゆきます。その中の3つの言葉に注目したいと思います。ひとつは、この手紙でペテロが語ってきたこと、指し示してきたことは「神のまことの恵み」であり、「この恵みにしっかりと踏みとどまりなさい」と勧めていること。もうひとつは、恵みに踏みとどまることがなぜ必要かという答えにもなると思うのですが、次の節にある「共に選ばれてバビロンにいる人々」という言葉です。「共に選ばれて」とはどういう意味でしょうか。これは手紙の始まりと終わりが対になっているのです。

1章1節はこう始まっていました。「イエス・キリストの使徒ペテロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ピディニアの各地に離散して仮住まいしている選ばれた人たちへ」、そして手紙の最後に「共に選ばれてバビロンにいる人々と、わたしの子マルコが、よろしくと言っています」となっています。きちんと応答していますね。キリスト者とは、神さまの選びによって誕生し、最後にありますように「キリストと結ばれている」ことによって、平和のうちに守られる存在なのです。ここに出てくる「バビロン」とはローマのことです。名指しでローマとは書かない。それは彼らにとって危険な存在です。バビロンという言葉を使うとき、そこには批判的なまなざしが含まれています。ローマ人は土木工学に秀でた人たちで、現在でも使われている水道橋や、円形競技場、風呂や、アッピア街道など道路網の整備など今日の都市計画の古代における完成形を築き上げました。神のお作りになった秩序としての自然に対して、人間が人為的に作り上げた人工の空間、時間の支配、そして、その始まりはどこかというならばバビロンとってよ

い。こちらはメソポタミアに登場した都市文明の最初の成果、灌漑水路と日干し煉瓦による人工の空間でした。そして聖書において、この都市型文明の登場は人間の罪とかさねて語られてきました。創世記 11 章に出てくるバベルの塔がその最初のもので、これは人間が神のように有名になろうと天にまで届く塔を建設しようとする話です。こういう巨大建造物を造るにはピラミッドも、中国の秦の兵馬俑も、日本の古墳などもそうですが、多くの人々を長期にわたって労働させる必要がある。バベルの塔を築こうとしたのは地上で最初の勇士ニムロドであると記されているのですが、こういう征服者が、征服した人々を動員して、自分たちの名声を後世に残すための巨大建造物を造るプロジェクトを行う。神は降って行ってこの試みをくじき、人々の言葉を乱した。いわば圧制者から救われたわけです。ここに「バラル」（混乱）というヘブライ語が使われるのですが、これはダブルミーニングになっていまして、バベルとバラル、さらにいうならば、このバベルの塔の物語を含む創世記が現在みるかたちに整えられていったのはバビロン捕囚のさなか、つまり、イスラエル民族の国が地上から滅ぼされて、主だった人々が新バビロニア王国の都バビロンに拉致されていった。その先で彼らはバビロンをバベルと重ね合わせ、人間が神のようになろうとする試みを神がバラルされる。混乱させられる。人間は神と並び立つものではないということを聖書を通して宣言した。ですから、世界帝国ローマの都をバビロンと呼ぶことにも、この同じ視線が隠されています。地上に永遠はない。皇帝は神ではない。人間が作り出そうとする平和は力による、武力による制圧であって、ローマ人は墓場を造ってそこを平和と呼ぶという言葉がこの時代に作られました。それはあくまでもローマ人の、ローマ人による、ローマ人のための平和

であって、すべての人が調和と一致をたもって生きられる平和ではありませんでした。真実の平和は自分を犠牲にして他者のために分かち与えることの出来る存在、人を仕えさせて自分を快適にし、高ぶるのではなく、人に仕えることの出来る自由さ、つまり愛によって生きる道を切り開き、その力を与える方にしか出来ない。すなわち、十字架と復活の主イエス・キリストのうちに、真実の平和の基礎がある。だから、この手紙の最後に言われている「キリストと結ばれているあなたがた一同に平和があるように」という祝福が輝くのです。キリストと結ばれていることに平和がある。平和は、わたしたちのために死なれ、死によってわたしたちを脅かし、屈服させようとする様々な悪魔的な力から復活という、天に蓄えられている朽ちることも汚れることもしぼむこともない希望を示してくださったキリスト・イエスの赦しの愛、このゆえに「まことの恵み」と言い得るキリストの愛と神の恵みにしっかりと留まること。そこにこの不安定で、朽ちてゆく世界に生きるわたしたちの逃れの場、希望をのぞむ観測所があるのです。手紙の最後で、ペテロは、ここに立つように人々を招いている。この場所があなたがたが安全に、平安に生きることの出来る場だと確信している。これは自分たちだけが安全な場所において、上から語っているのではありません。むしろローマの方が皇帝のお膝元だけにより厳しい現実を生きていたかも知れません。キリストを信じて、御言葉に従って生きようとするキリスト教徒たちは「共に選ばれて」と語られたように、どこにいても信じる生き方を形作ることによって、地上の価値しか信じない人々とぶつかりあう現実生きることとなります。人間を神のように祭り上げ、神格化し、忠誠を捧げるように求める政治体制のもとでは、それは苛烈なもの、迫害を生むこととなります。こうした現実には聖書の

中だけではなく、21世紀に生きる世界の現実でもあることに、わたしたち人間の根本的な罪が示されています。そして、キリスト者は苦難において連帯する。故郷を追われて、離散した仮住まいの人々となっている彼らは、同じようにローマ皇帝のお膝元で、選ばれてキリスト者として生きている仲間を持っている。こうして手紙をやりとりし、共に重荷を負いあう、気持ちを分け合い、支え合う、地上に置かれた神の民はいずれの場所にあってもひとつの民なのだという神学的な主張が「選ばれた」という表現のなかに隠されています。半田で仰ぐ主も、能登半島で仰ぐ主も、東京で仰ぐ主も、ロンドンで仰ぐ主も、聖書を通してあかしされるキリスト・イエスはお一人なのですから、その意味でわたしたちは具体的に半田の地にありながら、ひとつの公同の教会に属している。日本キリスト教団の場合ですと、それが全国47都道府県に1680幾つの教会・伝道所があり、それらが同じ信仰を告白し、同じ規則をさだめて歩んでいる。信仰において一致している。そのことがペテロの手紙でも言い表されています。ローマにおいても、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ピディニアの各地において、キリストを仰ぐ人たちもみな一つの体に属している。だから、お互いを思い、祈り、支え合う、そうした全体教会の枝の一つとして信仰を受け継いで今日あることを覚えたい。決して孤立しない。そしてそれは「選ばれて」とあるように、神さまの側からの一方的な申し出によって、呼びかけによって成りたつ。先週の説教で、かならず神さまの側からの呼びかけによって信仰は始まると申し上げました。信仰は神の言葉に聴くことによって始まります。神さまご自身が、御子を通して、わたしたちを招いて下さる。このご招待は神との交わりに活かそうとするものです。わたしたちは自己中心的で、自分というものから離れることが

できません。しかし、神は、ご自身の独り子をお送りになることでわたしを一人で生きるのではなく、キリストと共に生きる者となることを願っておられます。それは新しい生き方への招きです。生きているのではなく、生かされているのだということ、持っているのではなく、与えられたのだということ、わたしの生きる意味と目的が、神さまを軸にすえることで初めて明らかになってくる。与えられた命をどのようにして生きることが幸いなことなのか、死で必ず終わる命を恐れることなく、生きるにはどういう道があるのか、それを十字架と復活によって、示してくださったことが神の恵みの出来事なのです。キリスト・イエスのお言葉と業にいつも立ち返り、十字架のもとに留まることが、わたしたちを平安に活かすのです。ペテロはそれをあかしするために、ここまで手紙を書いてきました。そしてまとめとして「この恵みにしっかり踏みとどまりなさい」と重ねて勧めるのです。恵みとは自分では作り出すことや、生み出すことの出来ないものです。買うことも出来ない。ペテロがいう「恵み」とは、神さまがわたしたちに、一方的に与えてくださるもの、与えられるものです。「選ばれた」という言葉にもその響きがあります。アメイジング・グレイスという有名な讃美歌がありますが、あれは「くすしきみ恵み」と訳されますね。「我をも救いし、くしき恵み」というのが最初の歌詞ですが、恵みとは、神の選びによって、わたしたちが名指しされて、特別にいただくボーナスのようなものです。あり得ないほどの恵み、それはわたしたちの側の状態に左右されません。資格を問わない。恵みと憐れみはセットになっています。だから、この恵みにしっかり留まって生きるキリスト者の歩みは、わたしたちの人生において起きることを、神の言葉の中で捉えること、御言葉に照らして、わたしの歩みをはかり、整える生き方です。

そのために必要な備えを神はしてくださる。こうして、神さまから与えられた御言葉によって生きることにも留まることです。小学校のとき理科の時間に、白いキンギョソウを青いインクを溶かした水にさしておいたら花びらの色が青くなる実験をしたことがあります。ようするに花が茎をとおして水を吸い上げていることを教えるための実験でした。生物のなかには生まれたときには毒はないが、毒性のあるものを食べて自分の体に毒をたくわえて身を守るものもいます。基本は同じです。キリストの恵みに留まることは、キリストに結ばれて歩むことです。わたしたちキリスト者は、この世界、バビロンの文化とは違った価値観に生きるように招かれています。それは冒険であり、チャレンジだと申し上げました。イエスを主とすることは、人間の言い伝えにすぎない哲学やイデオロギー、また権力者を神とするような人間に頼る生き方に惑わされず、聖書の教えに従って人格と人生を形作って行くことを求めます。イエスを主と信じて洗礼を受けた者は聖霊によって新たに生まれたのですから、キンギョソウの例をあげましたが、わたしたちが根を下ろして吸い上げるのはイエスを通して語られた神の教えであり、そこに含まれる神の豊かな赦しの愛が、和解の福音がわたしを育てる養分です。これ以外に、わたしたちの群れを形成したり、はかたりする基準はありません。この恵みの消息に留まるのが、キリストの平和をわたしたちのうちに実らせてゆきます。この喜びを、今を生きる愛する人々にあかしする力を、礼拝を通して、わたしたちも頂いています。この恵みから遣わされるのが神の民の喜びです。

お祈りいたします。